

令和8年度 淀中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

Ⅰ 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

Ⅱ 全国学力・学習状況調査

※英語はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（CBT=Computer Based Testing）で実施。

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率（％）		平均無解答率（％）		平均IRTスコア 英語4技能 () 内は3技能（参考）
			国語	数学	国語	数学	
3 年	学校	110	50	42	14.4	23.1	445 (453)
	大阪市	-	60	55	5.4	11.4	499 (499)
4月23日	全国	-	63.9	57.0	4.9	10.4	499 (499)

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

調査結果とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について

成果と課題

○全国学力・学習状況調査

- <全体として> 調査結果から、調査対象である今年度3年生のきびしい学力実態が明らかになった。特に「学力に課題のみられる生徒」と位置づけられる生徒の割合が概ね4割前後（国語37% 数学41%）の割合になっていることは、ここ数年の取組の成果が現れているとは言えず、継続した大きな課題となっている。
- <国語の結果> 平均正答率で全国平均を約14P下回っている状況である。「話す・聞く」「書く」「読む」の領域では特に「読む」で下回っている数値が大きい、特にその領域のみに顕著な課題があるとは言えない。
- <数学の結果> 平均正答率で全国平均を約15P下回っている状況である。「数と式」「図形」「関数」「データの活用」の領域では、特に「図形」で下回っている数値が大きい、特にその領域のみに顕著な課題があるとは言えない。
- <英語の結果> 4技能の平均スコアで54P全国平均を下回っている状況で、下位層の割合が顕著に高い。国語・数学とはテスト形式が異なるが、学力状況が大きく全国平均を下回っている状況は同じである。

対象学年の3年生の国語・数学・英語だけではなく、全学年の全教科において、授業規律の確立と維持、教員の授業力改善と授業スタイルの变革、生徒の学習意欲の向上、個の状況に寄り添う補充学習機会の充実に、継続して注力しつづけている。その取組は、教員だけではなく、地域からの「学校元気アップ支援事業」による手厚いサポートと連携している。取組の方向性は間違っておらず、ほかに劇的な成果をもたらす改善策は見当たらないと考えているが、成果数値に結びついていないことが、学校として苦しいところである。

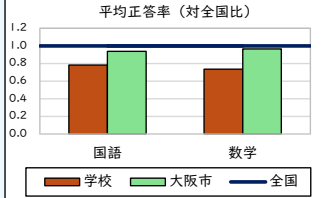
今後に向けて

前述の取組を粘り強く継続していくことで「学力に課題のみられる生徒」の状況改善につながるとの考えは変わらない。大阪市による支援であるサポーターや学習コンテンツを積極的に活用していくことで、取組の強化に結びつける。

令和8年度 全国学力・学習状況調査 教科に関する調査結果の概要（国語・数学）

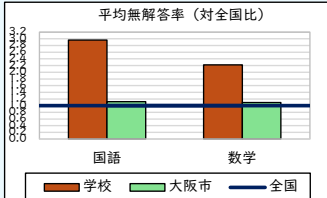
平均正答率（％）

	国語	数学
学校	50	42
大阪市	60	55
全国	63.9	57.0



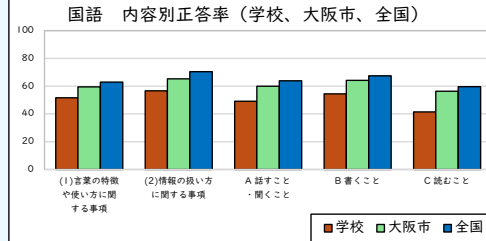
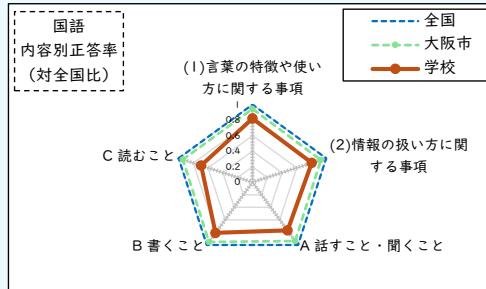
平均無解答率（％）

	国語	数学
学校	14.4	23.1
大阪市	5.4	11.4
全国	4.9	10.4



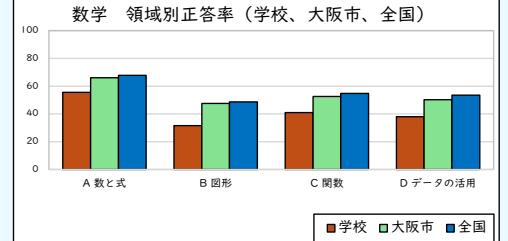
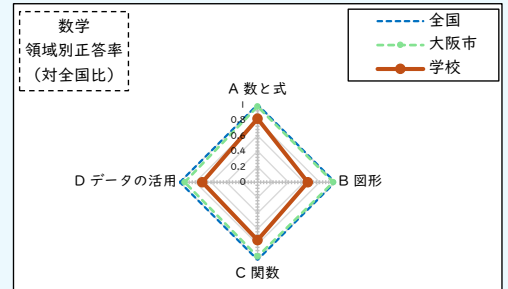
【国語】内容別正答率

学習指導要領の内容	対象問題数（問）	平均正答率（％）		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方にに関する事項	5	51.7	59.5	63.0
(2)情報の扱いに関する事項	1	56.6	65.3	70.4
(3)我が国の言語文化に関する事項	0	-	-	-
A 話すこと・聞くこと	3	49.1	59.9	63.9
B 書くこと	3	54.4	64.2	67.4
C 読むこと	3	41.5	56.3	59.7



【数学】領域別正答率

学習指導要領の領域	対象問題数（問）	平均正答率（％）		
		学校	大阪市	全国
A 数と式	5	55.5	66.1	67.8
B 図形	4	31.6	47.6	48.7
C 関数	3	40.9	52.5	54.8
D データの活用	4	38.0	50.2	53.5

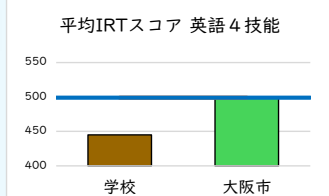


英語 平均IRTスコア

学校	445 (453)
大阪市	499 (499)
全国	499 (499)

※4技能の平均IRTスコアです

※（ ）内は3技能の平均IRTスコアです



【IRT(Item Response Theory：項目反応理論）とは】

児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学カスコアを推定する統計理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

【IRTスコアとは】

IRTに基づいて各設問の正誤パターンから状況を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

導入する年（中学校英語は令和8年度）の全国平均を基準値とし、経年比較が可能な形で算出します。

【IRTバンドとは】

IRTスコアを1～5の5段階に区切ったものです。3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなります。

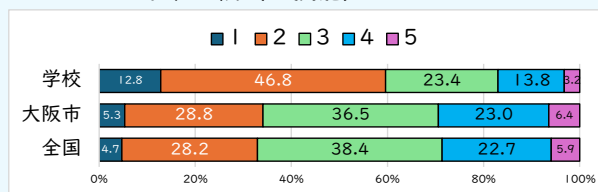
※IRTスコア・IRTバンドは、難易度の高い問題にしていると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出されます。

IRTバンド分布比較（4技能）

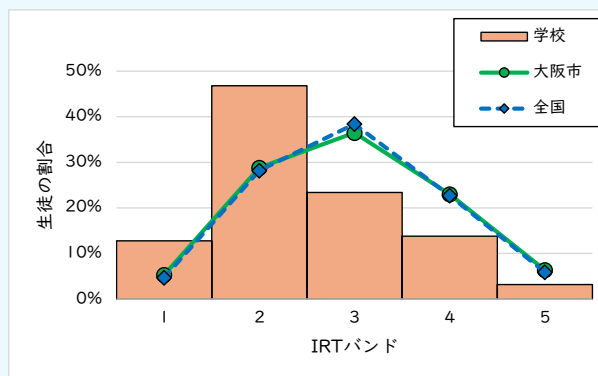
	1	2	3	4	5
学校	12.8	46.8	23.4	13.8	3.2
大阪市	5.3	28.8	36.5	23.0	6.4
全国	4.7	28.2	38.4	22.7	5.9

※4技能のIRTバンド分布です

IRTバンド分布比較（4技能）



IRTバンド分布グラフ（4技能）

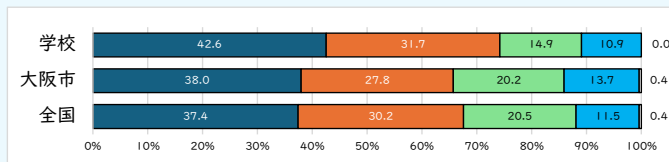


生徒質問調査より

※集計値を四捨五入するため、横軸合計が100.0%にならない場合があります。

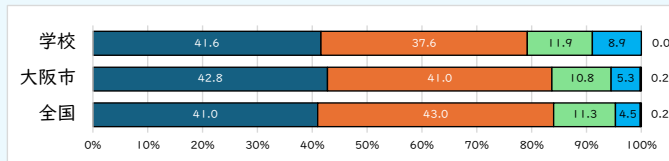
■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5 ■ 6 ■ 7 □ その他・無回答

質問番号	質問事項
(10)	将来の夢や目標を持っていますか



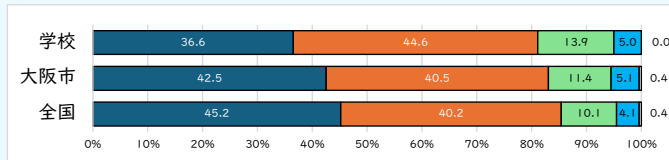
- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば、当てはまる
- 3 どちらかといえば、当てはまらない
- 4 当てはまらない

(8)	自分には、よいところがあると思いますか
-----	---------------------



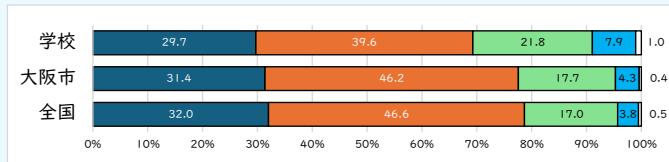
- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば、当てはまる
- 3 どちらかといえば、当てはまらない
- 4 当てはまらない

(15)	学校に行くのは楽しいと思いますか
------	------------------



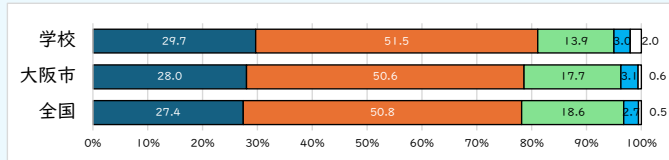
- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば、当てはまる
- 3 どちらかといえば、当てはまらない
- 4 当てはまらない

(16)	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか
------	---------------------------



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば、当てはまる
- 3 どちらかといえば、当てはまらない
- 4 当てはまらない

(22)	分らないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか
------	--



- 1 できている
- 2 どちらかといえば、できている
- 3 どちらかといえば、できていない
- 4 できていない